令和四年度入学者選抜試験問題　国語

注意

1　解答は、答案用紙の指定欄に記入しなさい。

2　開始の指示があるまで、問題冊子を開いてはいけません。

3　この問題冊子は、9ページまであります。問題冊子・答案用紙の印刷の不鮮明、ページの落丁・乱丁等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

4　この問題冊子は、試験終了後持ち帰ってください。

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。なお、設問の都合で、原文の一部を省略した箇所があります。

① 「よいひと」とはどんなひとをいうのだろうか。

たいていの人間に期待できそうなことはきちんとしてくれるひと。そういうひとは信頼できる。よいひとと呼んでよい。他人のためになるが誰もがするとはかぎらないことに尽力するひと。それならますますそうだ。こういうひとはむしろ、立派なひと、尊敬すべきひとと呼べそうだ。そういうひとが大勢いれば助かるし、よいひと自身も他のよいひとに助けられ、みながそのオン[a]ケイに浴する。だから、以上のタイプのよいひととは、私たちが一緒に生きていくのに役立つひとのことである。

ところで、私たちは別のタイプのひとも立派に思い、尊敬する。たとえば、自己鍛錬をオコ[b]タらぬアスリート、創作に没頭する芸術家、つねに工夫をコ[c]らす職人、などなど。自分の生き方をみずから選びとってショウ[d]ジンしている点に、私たちは感心する。

道徳と倫理は同じ意味で使われる場合もあれば、使い分けられる場合もある。使い分けられるときのその違いは大まかにいって「よいひと」の意味のこの二つの要素に対応している。道徳とは、私たちが一緒に生きていくために守るべき行為規範の体系である。私たちの共同生活の破綻を防いだり（たとえば、「ひとを傷つけてはいけない」）、共同生活をいっそう有意義にしたり（たとえば、「ひとには親切にすべし」）する教えがそこにふくまれている。

これにたいして、倫理は本人の生き方の選択に関わる。先に挙げたアスリートや芸術家の例にかぎらず、誰もが自分の人生を選んでいる。だから、倫理に含まれる教え（たとえば、「自分の能力を伸ばすべし」「自分の一生を大切にせよ」）もどのひとにもあてはまる。

「道徳と倫理のそういう使い分けは初耳だ」といわれるかもしれない。もっともだ。その違いはラテン語の mos とギリシア語の ethos に由来する。どちらも慣習を意味するが、ethos のほうは気高い性格という意味もガン[e]イする。「道徳」という日本語はラテン語起源の、英語でいえば moral の訳語にあてられる。「倫理」という日本語はギリシア語起源の、英語でいえば ethic の訳語にあてられる。

だから、日本語の道徳と倫理という語に上のような区別はもともとないけれども、ラテン語とギリシア語のこの語源を反映させて、世間のきまりを遵守する生き方を道徳的、矜持（きょうじ）ある生き方を倫理的と呼び分けることができる。

上の説明では、世間のきまりに自分が従うか否かの倫理的決断が自由にできるように聞こえるかもしれない。その点を強調する思想もある。自分で自分の生き方を選ぶ決断を称揚する実存主義がそれであり、ひとえに自己に誠実であることを重視する。

けれども、私たちはたいてい生まれ育ってきた環境に影響されて自分の生き方を選んでいる。すると、生き方の選択に関わる倫理と世間のきまりという意味の道徳は、結局、同じことに帰着するのか。いやそうではない。道徳について説明したときに用いた「私たちが一緒に生きていく」という語句に注意しよう。日常に使う言語、生まれ育つなかで身につける習俗や文化の伝統、さらには宗教がほぼ一緒のひとたちからなる結びつきを共同体と呼ぶ。これにたいして、文化や伝統や宗教が違っていてもその違いから相手を否定することなく一緒に生きていけるようにする結びつきを社会と呼ぼう。

近代化とは、価値観を共有する者たちから成る共同体が価値観の異なる人びとに開かれてゆく過程である。現代の多くの国々は母語が異なる移民を受け容（い）れている。こうした価値多元社会では、誰でも自分がよいと思う生き方を追求してよいし、本人が選んだ生き方を尊重すべきだという考えが社会に共通の規範として認められている。この規範は道徳に属す。

これにたいして、多様な生き方の選択肢とその選択肢のなかから自分の生き方を実際に選ぶことは――自分が生まれ育った共同体のなかで身につけた生き方を選ぶ場合もあれば、あるいはそれに反発して社会のなかで見聞した別の生き方を選ぶ場合もある――倫理に属す。たとえば、②「私はカトリックの教えにしたがって生きる」という決断は倫理に属し、「他のひとは別の宗教を信じてよいし、何の宗教も信じなくてもよい」という態度は道徳に属す。

③先に道徳を世間のきまりと呼んだが、世間という語は共同体を連想させるかもしれない。正確にいえば社会のきまりである。だから、「郷に入れば郷に従え」や「長いものには巻かれろ」という教えは、同質性を好む共同体のなかで摩擦なく生きていくための実用的な知恵ではあっても、自分で考えることを放棄しているから上記の意味での倫理ではないし、他人の生き方への抑圧につながる点で上記の意味での道徳でもない。

④すると、こうした教えがいまだに力をもち、ギリシア語やラテン語に由来する区別がもともとない日本では、倫理も道徳も結局は「既存の慣習に順応せよ」という命令にすぎないのではないか。その点の検討は大切である。とはいえ、そういう疑念をもつことのできたひとは、これまで説明されてきたことを理解したからこそそう問うたわけだ。その説明は日本語でなされた。だから、倫理と道徳の違いや近代社会の価値多元主義を日本語で思い描くこともできるはずである。

（品川哲彦『倫理学入門』中央公論新社による）

問1　傍線部aからeまでの片仮名の部分を漢字に直しなさい。

問2　傍線部①「「よいひと」とはどんなひとをいうのだろうか」とありますが、筆者はなぜこのような問いからこの文章をはじめたのですか、筆者の主張との関係で説明しなさい。

問3　傍線部②「「私はカトリックの教えにしたがって生きる」という決断は倫理に属し、「他のひとは別の宗教を信じてよいし、何の宗教も信じなくてもよい」という態度は道徳に属す」とはどういうことですか、筆者の主張にしたがって、説明しなさい。

問4　傍線部③「先に道徳を世間のきまりと呼んだが、世間という語は共同体を連想させるかもしれない。正確にいえば社会のきまりである」とありますが、筆者が「世間」と「社会」を分ける理由を説明しなさい。

問5　傍線部④「すると、こうした教えがいまだに力をもち、ギリシア語やラテン語に由来する区別がもともとない日本では、倫理も道徳も結局は「既存の慣習に順応せよ」という命令にすぎないのではないか。その点の検討は大切である」とありますが、筆者自身はどのように考えているか、説明しなさい。

二　次の文章は、『落窪物語』の一節です。主人公の落窪の君は実母と死別し、継母から事あるごとに酷い仕打ちを受けています。これを読んで、あとの問に答えなさい。

つくづくと暇のあるままに、物縫ふことを習ひければ、いとをかしげにひねり縫ひたまひければ、「いとよかめり。殊なる顔かたちなき人は、ものまめやかに習ひたるぞよき」とて、二人の婿の装束、いささかなるひまなく、かきあひ縫はせたまへば、しばしこそ①ものいそがしかりしか、夜も②寝も寝ず縫はす。いささかおそき時は、「かばかりのことをだに、ものうげにしたまふは、何を③役にせむとならむ」と責めたまへば、嘆きて、「いかでなほ④消えうせぬるわざもがな」と嘆く。

三の君に⑤御裳着せたてまつりたまひて、⑥やがて蔵人の少将あはせたてまつりたまひて、いたはりたまふこと限りなし。落窪の君、⑦まして暇なく、苦しきことまさる。若くめでたき人は、多くかやうのまめわざする人や少なかりけむ、あなづりやすくて、いとわびしければ、うち泣きて縫ふままに、

⑧世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり

注　ひねり縫ひたまひければ―落窪の君がよい手つきで縫い物をなさるので　二人の婿―継母の実の娘二人の婿たち　かきあひ―かき集めて　役―仕事　三の君―継母の三番目の娘　あなづりやすくて―人から軽蔑されやすくて

問6　傍線部②「寝も寝ず」、傍線部⑥「やがて」を現代語に直しなさい。

問7　傍線部①「ものいそがしかりしか」の「しか」、傍線部③「役にせむ」の「せむ」を文法的に説明しなさい。

問8　傍線部④「消えうせぬるわざもがな」を現代語に直しなさい。

問9　傍線部⑤に「御裳着せたてまつりたまひて」とありますが、これは今の何にあたりますか。次のaからeの中から選んで記号で答えなさい。

a　入学式　b　卒業式　c　成人式　d　入社式　e　結婚式

問10　傍線部⑦に「まして暇なく」とありますが、なぜこのようになったのか、理由を説明しなさい。

問11　傍線部⑧「世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり」の和歌は、誰のどのような気持ちを詠んだものですか、わかりやすく説明しなさい。

三　次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。なお、設問の都合で、返り点・送り仮名を省略した部分があります。

銘金人云、無多言、多言多敗。無多事、多事多患。至哉斯戒也。能走者奪其翼、善飛者減其指、有角者無上歯、豊後者無前足。①蓋A天道不使物有兼也。古人云、多為少善、②不如執一。鼯鼠五能、不成伎術。近世有両人、朗悟士也。性多営綜、略無成名。経不足以待問、史不足以討論。文章無可伝於集録、書B跡未堪以留愛翫。（中略）如此之類、略C得梗概、皆不通熟。惜乎、以彼神明、③若省其異端、X精妙也。

（『顔氏家訓』省事篇による）

注　金人—銅像　鼯鼠—ムササビ　五能—五つの能力　伎術—技術、技能。　朗悟—聡明　営綜—物事を営む、行う。　経—経学、儒教の基礎となる学問。　待問—人から尋ねられる。　史—歴史についての知識、学問。　文章—文学　集録—集めて記録したもの、詩文集。　書跡—筆跡　愛翫—愛玩、大切にする。　中略部分—経、史、文章、書跡の他に、医薬、音楽、弓矢などの例が引かれる。　神明—聡明な頭脳　異端—専念するものとは異なる様々な事柄。

問12　傍線部①「蓋」、②「不如」、③「若」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記しなさい。

問13　傍線部A「天道不レ使二物有レ兼也」を、すべて平仮名で書き下し文にし、現代語に訳しなさい。

問14　傍線部Bは「書跡は未だ以て愛翫に留むるに堪へず」と書き下します。それに従って返り点と送り仮名を加えなさい。

問15　傍線部C「略得二梗概一、皆不二通熟一」を、「梗概」の意味を明らかにしながら現代語に訳しなさい。

問16　X にあてはまる漢字一字を次の中から選びなさい。

「未」「仮」「安」「当」「間」

問 5	問 4	問 3	問 2	問 1	
				d	a
				e	b
					c

受　験　番　号

小　計　1

令和四年度入学者選抜試験答案用紙　国語その二

二

問6	問7	問8	問9	問10	問11
②	①				
⑥	③				

小計 2

三

問12	問13		問14	問15	問16
①	（書き下し文）	（現代語訳）	書跡未堪以留愛翫		
②					
③					

小計 3

受験番号